花踊りの伝承

渋川在住の杉江常治郎氏が書写した「雨乞御禮花踊歌」なる踊り歌唱集が当地に保存されており、それには明治 28 年(1895)9 月 13 日と記されています。大正年間に、旧渋川地区に古くから居住する住民によって踊りの保存会が結成され、保存会活動も大正時代にはじまったと言われています。

現在、保存会で継承されている歌唱集には、大正 8 年(1919)10 月 1 日付けで、伊砂砂神社社掌中村万壽吉氏による「本踊りについて」の小文が掲載されていて、これによると、この花踊りは雨乞い踊りとして村落に継承されたものであると称されています。踊りの奉納される伊砂砂神社は、近世まで大将軍社と呼ばれた神社で、伊砂々川に沿った位置にあることからこの名称になったようです。

神社建立の応仁 2 年(1468)9 月 13 日の翌年の干ばつのとき、村民が雨乞い祈願を行うと、幸いにして降雨があったため、お礼踊りとして神前に奉納したのが最初と伝えられています。

「花」の信仰と踊りの機能

現行の花踊りに類する踊りは、主として西日本各地に伝承があり、渋川同様に雨乞い神事の一環として伝えられてきたところです。滋賀県内はとくにこの踊りが密集分布する地域として全国に知られています。「太鼓踊り」という名称で踊られている地域も多く、上笠講踊り、太鼓踊り(栗東御園)、田楽踊り(上砥山)、鼓踊り(守山古高)などがあります。

花踊りは、雨乞いの願掛けには風流性を一段控えて笹を採り物としてまず踊り、その願いがかなったとき願済のお礼の意味を込めて華々しく飾り立てたハレの踊りを花踊りと呼んでいたのが、民衆の習わしでした。渋川の花踊りもこのような習俗と同様の背景からなります。

花踊りの芸態

現在の花踊りは、シンボウウチ 2 名、太鼓打ち 2 名、側踊り 20 名前後、歌い手数名から構成されています。歌い手は、歌唱をリードする音頭取りと、音頭取りの歌った一節を繰り返して歌う「返し」を担当する人々から構成されています。

踊り歌の詞章

道歌(みちうた)	シンボウウチ・太鼓打ち・踊り手が一列となって神社前の旧道から境内へ練り込むときの歌
御礼(おれい)踊り	その年が大干ばつで雨乞いをかけ、氏神のご利生で降雨になったことのお礼
参宮(さんぐう)踊り	出羽の国の姫が、羽黒の若者に誘われて、伊勢参宮する歌
阪東(ばんどう)踊り	阪東の若者が京都にやってきて、京の名所を見物し土産を携えて自分の国へと帰っていく歌
弁慶(べんけい)踊り	弁慶が京都の五条の橋で千人切りしたことが題材であるが、弁慶の装束を一つ一つ取り上げて説明する装束褒めの歌
綾(あや)の踊り	姑が嫁をいびるために、無理難題をふきかけるのを、嫁が機知でかわしていく内容の歌(六番からなる)
所望(しょもん)の綾踊り	本来は、綾の踊りのアンコール曲と考えられる。(二番しかない)
塩汲み(しおくみ)踊り	娘が浜辺で製塩のために海水を汲む作業をする姿を歌う歌
嫁振(よめふり)踊り	嫁と仲が悪くて、嫁いびりをする姑の歌
忍び(しのび)踊り	女性が恋人に逢引の場所を指定し、人に見咎められた時の言い訳の歌
御寺(おてら)踊り	お寺を門、庭、茶の居、客殿とまわって、造作や什器のすばらしさや手入れが行き届いていることなどを順次取り上げていく褒めの歌
御月(おつき)踊り	一月から十月まで、各月の行事や季節のものを数え挙げた歌
殿(との)の踊り	個人の邸宅の門、白砂、座敷、厩の様子を歌った歌
軍(いくさ)踊り	鎌倉時代の元寇(げんこう)のことを歌った歌
堺(さかい)踊り	堺の浜で見えるものを歌った歌
うわなり踊り	前妻が後妻をねたんで襲う「うわなり打ち」に取材した歌
暇(いとま)踊り	別れの暇乞いにもらった葦毛の馬や小脇差や金手箱は優れたよいものだけれど、そんな物より、もう一夜だけあの人と過ごしたいという内容
所望(しょもん)踊り	「見物衆の所望がござる」とあることからも分かるように見物人の楽しい踊りが終わってしまうことを惜しむ気持ちに応えて踊る

踊りは全部で 18 曲♪

どの曲も基本となる踊りの形が共通していて、歌を歌っている間は同じ節回し、同じ所作を繰り返します。歌の間奏部分はフシといいますが、フシの部分の太鼓の拍子や踊りの所作が曲によってそれぞれ異なっているのが特徴です。

例外は「道歌」でこれにはフシがありません。踊りの所作もごくシンプルで、境内に入場してきて円になり、踊りの隊形を整える目的で歌います。